

げんよう う つ ひめ へん げ
幻妖宇都姫変化

獅子宮敏彦

観^{かん}応^{のう}二年（一三五一）十一月下旬のことであつた。

下^{しもつけ}野^{かつやまじょう}の勝^{うじえいじんざぶろう}山城^{うつのみやうじつな}にいた氏家陣三郎は、宇都宮氏綱から呼ばれた。

氏家氏は宇都宮氏の一族で、南北朝時代には斯波氏に属して新田義貞を討ち取る大功を挙げたり、美濃や奥州に進出していく者も出たが、勝山城の氏家一族は宇都宮氏に仕え続けている。陣三郎は、その庶流に連なる人物であつた。

この時、二十一歳。

従って、氏綱は主君である。氏綱の父公綱^{きんつな}は南朝に属したが、氏綱は足利尊氏を支え続け、「氏」の名を賜るほどの信頼を得ている。居城は宇都宮にあり、この時は勝山^{ひな}にいる日奈姫を訪ねてきた。

日奈は、氏綱の妹である。但し、父公綱のもとにいて、父が南朝の没落と共に逼塞^{ひっそく}すると氏綱が引き取り、勝山で庇護^{ひご}させた。

勝山城は鬼怒川を見下ろす崖上に建てられ、要害であるだけでなく、日光と高原山^{たかはらやま}が見える明媚^{めいび}な場所に位置している。氏綱は、その近くに日奈の住まいを造らせた。そこにはかつて合戦で恋人を失った氏家の姫が住んでいて、小さな鐘を造ってもらい、恋人の菩提を弔っていたという。

今は鐘だけが残ри、そこで陣三郎は日奈の警固役をしている。

日奈を訪ねた氏綱が、しばらく兄妹だけで話し込んだ後、陣三郎は、その場に呼ばれた。入っていくと、氏綱から、

「陣三郎よ、その方これよりわしと日奈の鎌倉行きに同道せよ」

と言われた。

主命とあらば否やはなく、畏まって承知する。しかし、ことはそれだけではなかった。

「但し、これより日奈には宇都宮代々の当主に伝えられし秘術を行う。そなたにはそれにも立ち会ってもらう。同道の件と併せ、それが日奈の望みだ」

「陣三郎殿。これより日奈が如何^{いか}になろうと、これまで通り側にいて守って下さいますか」

日奈からは、真っ直ぐに見つめられた。

陣三郎は、聞いたこともない秘術なるものが出てきて、

「それは如何なることでございましょう」

と、戸惑うしかない。

「実はのう——」

宇都宮家には、さる姫君の魂魄こんぱくが現世に無念を残して留まり、封印されているという。どういう姫なのかは氏綱も知らず、ただ宇都姫うつひめと呼ばれている。この姫の魂魄は宇都宮家の十五歳の姫に憑依ひょういし、天下を争う兄弟の弟の方を打ち倒した時に無念が晴れると伝えられているらしい。

「この姫君の魂魄をいつの日か成仏させるは蓮生法師れんしょうのご遺託である」

蓮生法師とは、鎌倉幕府の有力御家人にして、藤原定家と親交を結んだ歌人としても名高い宇都宮頼綱よりつなのことであった。

つまり秘術とは、その魂魄の封印を解き、日奈に憑依させようというのである。日奈は十五歳であった。

「立ち会ってくれるな」

「陣三郎殿が側にいてくれたなら、日奈に怖いものはありません。お家の役に立てるのなものよりの喜びです」

日奈の表情には、並々ならぬ決意が表われている。また真っ直ぐに見つめられ、陣三郎も、しっかりと頷いた。

それからのことは、夢か幻を見ていたように思われてならなかった。氏綱は恭しげに二つの桐箱を取り出し、まず一つを開けると中に色紙が入っていた。和歌が書かれてあった。

玉の緒よ 絶えなばたえね ながらへば
しのぶることの よわりもぞする

「これは『小倉山莊色紙和歌』にある式子内親王様しよくしないうしんのうの歌——」

陣三郎は知っていた。日奈に教えてもらったからである。日奈の父公綱は蓮生以来の宇都宮家の伝統にも通じ、勇将であると同時に歌人でもあったため、日奈もその薫陶を受け、和歌に詳しかったのだ。

『小倉山莊色紙和歌』とは、藤原定家が蓮生の頼みで山莊の障子に貼る色紙に和歌百首を撰きぎごうして揮毫したものである。宇都宮家には、この百枚の色紙が伝わっているということで、これはそのうちの一枚であった。

「日の本の歌はただの歌にあらず。言霊ことだまとなりて神秘なる力を有ゆうせしものなり」と、氏綱は言う。

「式子内親王と定家の間には忍ぶる恋があったという。『玉の緒』とは身体と魂魄を結ぶ緒のこと——即ち命じゃ。この歌は忍ぶる恋の耐え難さに命が絶えることも厭いとわぬとの激しき心を詠ったものにて、その力により宇都姫の魂魄を封印してまいった。これを今より解き放つ！」

氏綱が、いま一つ桐箱を開けると、そこにも色紙が入っていて、別の歌が記されている。

来ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに
焼くや藻塩の 身もこがれつつ

これも知っていた。同じく『小倉山荘色紙和歌』に採られている定家自身の歌である。

氏綱は、定家の歌を朗々と吟じつつ、二枚の色紙を隣り合わせに置いた。すると、妖しきことかな。どこからともなく内親王の歌が聞こえてきたかと思うや、その色紙から薄い桃色をした靄^{もや}の如きものがゆら〜りと湧き出してきたではないか。それは、じっと目を閉じていた日奈を包み込み、靄がいくらか時を掛けて日奈の身体にじんわりと沁み入り、靄が消えていく。

そして、日奈がぱちりと目を開けた。

日奈は、すっと立ち上がり、氏綱と陣三郎を見下ろし、こう言ったのである。

「ようやく外へ出る時が来たか。で、陣三郎というのはどっちだ」

日奈は、すっかり人変わりしていた。なにしろ、こっちが陣三郎であるとわかった途端、

「よき男よのう。今宵、我^{われ}と閨^{ねや}を共にするか」

などと言ってくるのである。

それを氏綱が、

「姫様、この世に顕現^{けんげん}なされたからには何卒ご悲願を果たして下さりますよう」

と、丁重にたしなめ、

「案ずるな、わかっておる。ただの戯れじゃ」

くすりと笑った。

最早、日奈ではなく、宇都姫と呼ぶべきであろう。

「して我を呼んだからには、今、天下は兄弟で争っているのだな」

「しかり――」

と、氏綱は説明した。

天下は足利尊氏と直義^{ただよし}の兄弟によって争われていた。この時、直義は京を脱出して鎌倉へ到着し、尊氏は南朝に降って直義討伐の宣旨を賜り、それを追ってきているのである。尊氏勢は三千、迎え撃たんとする直義勢は五十万を号している。

「大層な差であるのう。かほどに兄の方が弱いのか」

「五十万は誇張でしょうが、関東では左兵衛督殿（直義）に味方する者が多いのは事実」

「我は歌によって封じられ、歌によって解き放たれし身なれば、歌を使って幻妖の術を操ることもできる。よって我を直義に会わせれば、呪いの歌を用い、そやつをたちどころに狂い死にさせるはたやすきこと――」

姫は、満々たる自信を見せた。かの菅公が火雷となり、怨敵を落雷にて打ち殺したようなものと、陣三郎は思った。

「されど我も宇都宮の者。お家が戦で勝ち、大きくなることを願うておる」

「もったいなきお言葉」

「ならば勝つために直義の軍勢を減じねばなるまい。その算段はあるのか」

「関東には将軍でも左兵衛督殿でもない主がおられます」

光王といって、尊氏の子である。正室の子としては後継者である義詮の弟に当たり、この時、十二歳。

鎌倉にいて関東の統治を任されているが、尊氏との関係がよくなく、直義の養子となっていた。そのため、実父より直義に懐き、今回も直義を快く迎え入れている。

「さればこの光王君が将軍にお付き遊ばされたなら、これに従う者少なからず――」

「なるほど、その和子に直義とやらを見限らせればよいわけか。では我によき考えがあるゆえ、我をその和子に会わせよ。この身の本体である日奈姫は歌も詠めば舞もできるようじゃのう」

確かに日奈には舞の素養もあった。公綱が芸に明るかったこともあるが、南朝は劣勢が多かったため、芸人に身をやつして逃げる意味もあり、日奈はそうしたことを身に付けたと聞いている。

しかも、宇都姫は、

「日奈だけでなく、陣三郎も笛をたしなむとか」

このことまで知っていた。

「宇都宮の家は今も武辺のみではないのであろう。ならば我らは芸人一座となって鎌倉へまいろうではないか」

蓮生以来の伝統は家中に染み渡り、勝山や宇都宮には音曲に通じた者が少なくなかった。氏綱も鼓を打つ。

氏綱は、家中から適任の者を集め、氏綱自身も加わった一行は、京で評判の女曲舞宇都夜叉一座を称して旅立った。

ただ目的地が鎌倉ではなくなった。駿河まで出てきた尊氏勢は薩埵峠^{さつたとうげ}に籠り、これを公称五十万の直義勢が取り囲んだ。よって直義も鎌倉を出て、伊豆国府まで進出したのである。そして、これにも光王が同道していた。

「和子様の御座所に戦勝祈願の舞を披露いたしたき旨、すでに承諾を得ております」

「大儀」

氏綱の言葉に、宇都姫は満足げに頷く。

直義が京を脱出すると、尊氏のもとから薬師寺公義^{やくしじきんよし}が宇都宮に来て、状況を伝えていることを、陣三郎も聞いていた。公義は尊氏の執事であった高氏^{こう}の重臣で、光王のもとにも高一族はいる。氏綱は、公義を介して、その高一族から直義方の情報を取得、こちらからも公義経由で、光王に宇都夜叉一座を推奨してもらったのである。

一座が伊豆に入った時は、十二月になっていた。光王の御座所へ招かれ、日暮れてから庭に設けられた舞台上、宇都姫が舞うことになった。陣三郎と氏綱も、同じ舞台上で笛と鼓を受け持つ。

宇都姫は、水干立烏帽子^{すいかんたちえぼしひばかま}緋袴の白拍子姿で舞台に立ち、二枚の色紙を両手に持って舞いながら、二首の歌を朗々と詠^{えい}じた。

人もをし 人もうらめし あぢきなく
世を思うゆゑに 物思う身は

ももしきや 古き軒端^{のきば}の しのぶにも
なほあまりある 昔なりけり

これも『小倉山荘色紙和歌』に採られている歌であった。色紙も定家や式子内親王と同じく小倉山荘のものと、お家に伝わっているのを持ってきたのだ。

歌は、後鳥羽院と順徳院のものであった。この二人は親子で、鎌倉幕府に抗して敗れ、隠岐と佐渡に配流となり、帰京の願いがかなわぬまま無念の死を遂げている。

姫は、両院の色紙を扇の如く優雅に使って舞いながら、その歌を繰り返し詠じた。すると――。

いずこからともなく霧が湧いてきて、辺りに漂い出した。それは次第に濃くなっていくかのようで、明かりの火も勢^{げん}いを減じ、まわりの光景が暗さを増して、霧にぼやけてくる。

しかし、明らかな怪異を感じながら、陣三郎は、笛をやめることができなかった。しかも、そうでいながら、おのれの吹く笛の音色が全く聞こえてこないのである。

それは、隣の氏綱も同じであった。やはり鼓を打ち続けているが、その音は聞こえず、氏綱の場合は口が空いているというのに、この怪異に一語も発していない。陣三郎と氏綱ばかりでなく、まわりの全てがそうであるように思われた。座敷に居並ぶ光王と近臣や侍女たちも凝固しているように見えるのである。

その中で宇都姫の声だけが妖しく響き渡り、舞っている姿がくっきりと浮かび上がるかの如くに見えた。

そして、何度目になるかわからぬ歌の繰り返しがだんだんと聞こえなくなり、宇都姫の姿も溶けていくかのように消え失せて、まわりの人々も光景も何もかもが、濛々と立ち込める霧の中に没し去った。自分がまだ笛を吹いているのか、どういう姿勢でいるのかもわからず、閉じられぬ目だけが霧を見つめていると、そこに何かがぼうと浮かび上がる。

人の形に見えた。手があり、足があり、頭がある。しかし、何を着ているのか、どういう顔をしているのかはわからず、ただ黒い人の形だけが浮かび上がっている。

それは二つあった。どうやら座っている感じで、そこから人語が聞こえた。

——兄宮様、私たちはどうなるのでございましょう。

——弟宮よ。足利相模守は鬼畜なり。大塔宮のご最期を見ても、我らがたとえ宮であつたとて、ゆめ生き永らえるとは思ふべからず。

まだ子供と思われる声で、宮という言葉が示す如く高貴な響きを伴い、そこに新たな黒い人型が、ふいとまた二つ湧き出してくる。

そちらの人型は立っていた。先の人型より明らかに大きく、やはり先の方は子供で、後の方は大人のようなようである。そして、大人が子供に近付き、これに気付いた子供の方も驚いたような動きを見せた。そうした人型の動きは、どちらもぎこちなげに感じられ、陣三郎は、かつて見た木偶や傀儡を操る芸を思い出していた。

しかし、まことの人らしくない動きとは裏腹に、声は妙に生々しい。この時も、近づく人型に向けて、

——お前は足利相模守！

と、発した子供の声には、満々たる憎しみが籠っていた。これに対して、

——五宮様、六宮様、ご健勝そうでなにより。

と、返す大人の声には、悪辣なる嘲笑の響きがある。それでも、うわべだけは慇懃さを装い、

――されど幽閉暮らしはお身体によろしからず。よってこの相模守、今日はお二人のために薬を持ってまいりました。これ粟飯原氏光、宮様方に薬を飲ませてさしあげよ。

――身体によくないとは笑止な。ここに私たちを幽閉したは、その方ではないか。

――弟宮よ。あれは薬にあらず毒ぞ。相模守は我らを毒害せんとしておるのじゃ。

子供の声は憎しみの中に、歳相応の恐れを滲ませている。

しかし、大人の方に憐憫の情は感じられなかった。

――なにを埒もなきことを仰せあるか。この相模守がさようなことをするとお思いか。さ、氏光、はよう飲ませるのじゃ。

――はっ。

大人のもう片方が先の人型にぐいと近付き、子供が嫌がる口を無理やりこじあげ、その中へ何かを押し込んだ。するとしばらくして、飲まされた二体は苦悶の声を上げ、苦しげに喉を掻きむしったかと思うと、前のめりに突っ伏したのである。やはり声は生々しく、動きはぎこちないままで――。

そして、倒れた二体はそれきりぴくりとも動かず、

――さすが唐土より取り寄せし鳩毒はよう効く。よいな、氏光、このことはわしとお前、二人だけの秘事ぞ。

――はっ、心得ましてござります。

――これで大塔宮に続き、南朝の皇子を二人始末してやった。わははははは！

相模守と呼ばれたものの哄笑が響き渡り、四つの黒い人型は霧に溶け込むように消えていく。

そして、

「な、なんじゃ今のは――」

と、別の子供の脅えた声が聞こえた。

陣三郎は、この声には聞き覚えがあった。舞台に上がる前、光王から言葉を賜っている。その時と同じ声であった。しかも、これに応じて、

「和子様。和様が、今、共におられる足利左兵衛督は、以前、大塔宮護良親王様を害しただけに留まらず、いまだ十四にあられた五宮恒良親王様、十三の六宮成良親王様をも手に掛けていますのでござります」

という女性の声が聞こえた。

「さような鬼畜の者と共におられず、正しき父上のもとへお帰りをなされませ。この場には將軍の信任厚き宇都宮下野守がおりますゆえ、その者を頼られますように――。そして、今見たことは下野守だけに打ち明けられ、余人には洩らされますな。もし左兵衛督の耳に入らば、御身が今の宮様方と同じ運命になりますぞ」

宇都姫の声である。これを最後に霧がすうっと晴れていき、陣三郎の耳におのれの笛と氏綱の鼓などの音曲、それに宇都姫の歌が聞こえてきた。歌はもう後鳥羽院と順徳院のものではなかった。

秋の田の かりほの庵の 苦をあらみ
わが衣手は 露にぬれつつ

春過ぎて 夏来にけらし 白妙の
衣干すてふ 天の香具山

同じく『小倉山荘色紙和歌』の天智天皇と持統天皇の歌である。

姫の舞っている姿や、座敷に居並ぶ光王たちもはつきりと見え、明かりの火も煌々と燃え盛っている。

そして、この歌を最後に宇都夜叉一座の舞台は終わった。陣三郎は茫然としていた。それは氏綱も同じであった。しかし、他の者たちに特に変わった様子はなく、それは座敷に居並んでいる面々も同じように思われたが、一人だけ違っていた。

光王だけは、明らかに顔が引きつっているではないか。

氏綱と顔を見合わせた陣三郎が、宇都姫の方へ目をやると、姫は、こちらを見て妖しく微笑んでいたのである。

舞台を降りた宇都夜叉一座は、控えどころに宛がわれた部屋へ引き上げてきた。それであの怪異を見たのが、やはり陣三郎と氏綱だけのようだとわかった。他の者たちは霧が湧き出したことさえ知ってはいなかったのである。

二人を前にして、宇都姫も言った。

「御座所の者でもあれを見たのは和子殿だけじゃ。しかも、和子殿には四人ともきちんとした人に見え、他の三人は顔がぼんやり霞んでいても、足利相模守の顔だけはしかと見えている」

足利相模守とは今の左兵衛督直義のことである。かつて鎌倉にいて北条残党の蜂起に敗れて退散した折、幽閉されていた後醍醐天皇の三宮護良親王を殺害したことは知られている。

「それが五宮と六宮まで害しておられたのですか」

陣三郎の問いに、氏綱は知らぬと答えた。

恒良親王と成良親王は新田義貞に奉じられていたが、義貞が敗れた時に捕えられ、以後の消息はわかっていないらしい。

「南朝の中では栗飯原氏光によって毒害されたとの噂があるようじゃ。誰の命によるものかはわからぬが、この噂を使い、後鳥羽・順徳両院の歌に込められし怨念で、あのような夢幻を現出させた。両院の怨念が幕府を牛耳る弟に向けられているからじゃ」

両院は、鎌倉幕府二代執権北条義時を追討せんとして敗れ、配流の憂き目にあった。義時は、尼將軍と謳われた政子の弟であり、元々は宗時という兄もいて、兄の死により二代目の座がめぐってきたのである。

「そして、その怨念を天智・持統両帝の歌で祓った」

宇都姫は、陣三郎と氏綱の前に四枚の色紙を置いた。今挙げた四人の色紙である。最初は後鳥羽・順徳の色紙を持っていたのに、いつの間にか天智・持統に持ち替えていたのだ。それも全くわからなかった。

陣三郎は、たとえ五宮六宮毒害があったとしても、謹厳実直で聞こえる直義が命じたとは思えなかった。護良親王を害したのも、鎌倉放棄の際はそうするよう言われていたのではないかと思っている。しかし、今は直義を倒さねばならない。

「五宮と六宮は和子殿に歳が近い。よって和子殿はあの二人の運命を自分にも重ねることであろう。我が言うた通り和子殿は宇都宮を頼ってくるぞ」

宇都宮勢が薩埵峠にいる尊氏勢を救援すべく宇都宮を発ったのは十二月十五日であった。しかし、この時、宇都宮勢は高一族だという三戸七郎みつとしろうを総大将に担いでいた。そして、軍勢が下野天命宿に至ると、七郎は狂死し、以後は氏綱が率いる。

この奇怪な出来事は、当初、氏綱が宇都宮勢にいなかったことを意味する。宇都宮勢は薬師寺公義が主導して、氏綱の帰りを待つことなく彼の担ぐ三戸七郎を総大将に出発したが、天命宿で氏綱が現われ、七郎は用なしになったのである。狂死という奇怪な死に様がなにかしら怪異なものの介在したことを窺わせる。

そして、以後の宇都宮勢は各地で直義勢を打ち破る破竹の進撃を続け、月末には薩埵峠の直義勢も崩壊した。

この快進撃には五十万を号した直義勢が瓦解して、宇都宮勢に続々と加わったことが挙げられる。宇都宮勢にはそうするに足る何かがあったようだ。氏綱は、誰かを奉じていたのではないか。実際、薩埵峠の戦いにおける光王の居所は判然とせず、安房にいたとの奇説まで存在するくらいである。

いずれにせよ、翌年一月五日、尊氏は鎌倉へ入り、直義も降伏。そして、二月二十六日、直義は兄尊氏により毒害された。用いられた毒は奇しくも鳩毒であったと伝わり、その前日の二十五日に光王が元服して、足利基氏と名乗っている。まるで基氏元服の門出に、鳩毒で殺される直義が必要であったかのようではないか。

直義の死の知らせを、陣三郎は、同じ鎌倉で聞いた。此度の合戦で大功のあった氏綱は基氏からの信任を大いに受けることとなり、下野だけでなく上野・越後にまで勢力を広げようとしている。但し、陣三郎は、宇都姫の警固を命じられていたため、武功とは縁がなかった。

ただそれを無念と思う心は、不思議と湧いてこない。

直義の死から数日後、陣三郎は、氏綱、宇津姫と共に、その最期の場所となった延福寺をお忍びで訪れた。

今や実力者となった氏綱が頼むと、寺僧は直義の部屋も見せてくれた。そこで三人だけとなり、

「これでようやく我の怨念も解かれた」

と、宇津姫が言う。

「我はのう、蓮生法師の孫じゃ。そして、北条得宗家の執権^{つねとき}経時殿に嫁いだ」

「北条経時殿ですか。余り聞いたことがありますね。ましてや執権に我が家の姫が嫁いでいたとは――」

と、氏綱が応じた。

陣三郎も知らなかった。

「さようか。ならば爺様が伝えたくなかったのであろう。なにしろ経時殿は僅か四年しか執権をならさず、二十三で亡くなられた。我もその一年前に十五で死んだ」

北条経時は、名執権と謳われた泰時の孫であった。泰時の子が早世したため、孫が継ぐことになったのだが、四年で病死。経時の子も幼かったため、執権には弟の時頼が就き、以後、その子孫が得宗の座を引き継いでいく。

「まことに無念なことであった。経時殿には幕府の政^{まつりごと}をこうしようという強き思いがあった。我も経時殿のなさりようを楽しみにしていた。それがかようなこととあいなり、しかも、経時殿には二人の子がおられたというに――無論、我の子ではないのだが、その子は仏門に入れられてしもうた。仏門に入れば経時殿の跡を継ぐことができぬ。二十三と十五の夫婦が相次いで死に、幼子^{おさなご}は仏門に入れられる。なにやら臭いはせぬか」

「と申されますと――」

「その頃の鎌倉には宇都宮を外戚とし、政治を改めんとしていた経時殿をよしとせぬ者どもがいたのよ。そやつらが時頼と組み、我と経時殿を毒害し、時頼は執権となった」

「毒害とは――まことでござりますか」

「私も死ぬ前にはな、なにやらおかしい気がしたのじゃ。これはやられたと――。よって経時殿のことが気掛かりで魂魄をこの世に留めた。経時殿もその頃から病がちであられたからのう。さすれば経時殿も一年後には亡くなられ、そのお子たちにはかような仕打ち。我は時頼一味の謀^{はかりごと}を確信し、無念の思いを抱いて兄と争う弟にこの怨みをぶつけてやらねば現世を去れぬ魂魄となった。これでも生前の我はもっとおしとやかな女であったのじゃがな。そして、これが宇都宮の災いになることを恐れた爺様に歌の力で封印されることとあいなった」

「そうでしたか。得宗家の外戚といえど三浦や安達といった一族がなり、幕府でも権勢を振るっていましたな。もし経時公健在であれば我が家もそうになっていたのしょうな」

「さあ、どうであろうのう。なにしろ、此度、現世に顕現してみれば、すでに北条は滅び、三浦は相模に残っているものの、あれは庶流で本家は北条に滅ぼされたそうじゃのう。安達の家も乱を起こして多くの者が死に、残りも北条と共に没落したという。儚^{はかな}きものではないか」

「――――」

「よって此度、兄と争う弟を滅ぼしたことで、最早、現世に未練はない。聞けば直義なる人物、なかなか立派な者であったようじゃが、それだけに兄といつ終わるかわからぬ争いを始めたのが残念であった。されど、これが人の世の変わらぬ姿なのであろう。いつでも誰かがどこかでいがみ合い、憎み合って、遂には殺し合う。愚かなることじゃ。されば我も旅立つこととする。余りに時が経ちすぎたゆえ、あの世で経時殿が待っておられるのかどうかかわからぬがのう。我のせいでおかしなものに取り憑かれた日奈の今後のことはよろしく頼むぞ。十五の身に重き負担をかけさせてしまった。日奈に願いがあれば必ずかなえてやってくれ」

「畏まってござります」

氏綱は、恭しく頭を下げた。

「されば陣三郎にちと話がある」

そう言われ、陣三郎は、一人別室へいざなわれた。

「我がこの身体を離れたる時は、そなたこそ日奈のことを頼む」

「わかりましてござります。これまで以上にしっかりとお守りいたします」

「そうではない。鈍いのう。日奈はそなたのことを好いておるぞ。うふふふ」

と、宇都姫は妖しく笑った。

陣三郎は、ぽかんとしている。

そういえば、宇都姫は現世に顕現した時から、日奈に舞の素養があることや、陣三郎が笛をたしなむことを知っていた。南朝の中で恒良・成良両親王の死について、毒害の噂があることも――。日奈の心を読めていたようである。

「されば陣三郎、先も言うたように、かつては栄えた北条も三浦も安達も今は見る影もない。この世は儚きものだ。宇都宮の家も此度は確かに大功を挙げ、大きくなった。されどそれがいつまで続くかはわからん。よって陣三郎、かくの如き世にあっても日奈を離さず、幸せにしてやってくれ。あれは持ってきてくれたのだな」

「はっ」

陣三郎が取り出したのは、勝山で氏綱が持っていた桐の箱であった。中に式子内親王と定家の和歌を記した色紙が納められている。

陣三郎が、その二つの色紙を並べて宇都姫の前に置くと、姫はそれを重ねた。

「陣三郎、定家の歌を詠じてくれ」

陣三郎は、言われた通りにする。一方、目を閉じた姫も内親王の歌を詠い出し、その身体から薄い桃色をした靄の如きものがゆら〜りと湧き出してきた。そして、

「これで忍ぶる恋も終わりじゃ。氏綱にはよしなに言うておいてくれ。日奈を大事にしてやれよ。さらばじゃ、陣三郎！」

靄は天井の方へ立ちのぼっていったかと思えば、そこへ染み入るようにして消えてしまったのである。

姫の身体が揺れ、倒れそうになったため、陣三郎は、慌てて抱きとめる。

そこで、姫の目がぱちりと開かれ、

「あっ、陣三郎殿」

と言ってきた。

日奈が戻ってきたようである。

「大丈夫でございますか」

「はい、別に変わりはないようです。ことはうまくいったのでしょうか」

「姫様のおかげにて――」

「そうですか。お役に立ててよかった」

「されば殿より此度のお礼として姫様の願いはなんでもかなえるとのお言葉。遠慮なく申されればよろしいかと――。あっ、いつまでもかようなことを、し、失礼を――」

陣三郎は、抱きとめていた手を慌てて離そうとしたが、

「いえ、かまいませんぬ」

と、止められた。

「兄上がそう申して下さっているのなら、日奈の願いは一つです。陣三郎殿と勝山のあの屋敷で暮らしたい。鬼怒川を見て、日光や高原の山々を見て、共に暮らしたいのです。それであの鐘と一緒にについて下さいませんか」

「鐘を、ですか」

「以前、あそこに住んでいた姫は、自分のように好き合った者同士が決して離れ離れにならぬことを願って、あの鐘を造らせたといいます。よって、あの鐘を二人でつければむすばれるのだと――。私はあれをむすびの鐘と名付けていました」

「むすびの鐘ですか」

「陣三郎殿には武人として大いに働きたいとの思いがおりでしょうが、いけませぬか」

日奈は、真っ直ぐに陣三郎を見ていた。

陣三郎も、その目を真っ直ぐに見返し、こう答えた。

「されば勝山へ戻って、一緒にその鐘をつきましょう」